



Title	現実と理想の間 : フォークナー覚え書
Author(s)	山本, 哲
Citation	Osaka Literary Review. 1969, 8, p. 103-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現実と理想の間

—— フォークナー覚え書 ——

山 本 哲

〔序〕

サルトルはフォークナーの時間性を形而上学的視点から捉え、「フォークナーは人間を未来のない全体とすることができる」と言った。¹ また、カーンも、フォークナーの高い芸術性を認めながら、「ウィリアム・フォークナーとともに、われわれは黒い文学の一番黒い部分にはいる」と断言したことがある。² なるほど、南部社会瓦解の諸相を描くこの作家をみれば、彼らの指摘には一理ある。ただし、その場合、我々は彼らの批評の妥当性に関してあくまで「主としてフォークナーの初期の作品においては」という限定を迫られていることを念頭に置きたい。なぜなら、所謂ヨクナパトーファ・サーガを有機的に見た時、それは必ずしも淀みのように死んだ時間と悪夢のような急激な南部社会の衰微とを提示するのみに終わっているとは言い難いから。「深黒の部分」は正しくフォークナー倫理の起点ではある。が、それは言わば現実に対する作者の率直な道義的反応ないしは批判とみるべきであろう。他方には当然フォークナーが理想と仰ぐ人間の存在状況がある。人間は本質的に如何なる相互関係を有するものか。この間に具体的に答えているのが実はフォークナーの後期の作品群であって、そこに至っては、我々はもはや停滞した南部社会をみているのではなく、逆に、無限の可能性を秘めた未来へのフォークナーの力強い提言をさえ垣間見ることができる。その暗から明へ、死から生へ、破壊から創造への転身の中に、我々は現実と理想の間を究めていこうとするこの南部作家の倫理追求の能動的な一面を知ることができるように思われる。本論では、先ずその現実の事情を瞥見した上で、フォークナーが如何なる方法を

もって理想を述べ、その実現を語るに至るかを考えてみたいと思う。

〔I〕 南部社会の現実のこと

前号で触れた通り³、フォークナーの作品群はあくまで即現実的であり、彼の独創性は、南部という特殊社会の有為転変に執着しつつも、ある程度まで普遍的な倫理的視点から、南部人の人間本性からの逸脱の程を抉り出すところにある。白人種によるフロンティアでの掠奪、奴隷制度、プランテーションをめぐる経済的闘争、異人種混交、南部成金たちの空虚な貴族気質⁴——かかる道義的矛盾の上になる旧南部の栄光とは何を意味するか。言うまでもなく、それこそ『アブサロム、アブサロム!』のトマス・サトペンを必然的没落へと導いていく南部の道義的過失の具象である。サトペンの度重なる悪魔的掠奪、混血の妻とその子チャールズの放棄、チャールズの出現、サトペン家の混血の恐怖、兄弟殺し、相続人の喪失、そしてサトペン家の崩壊という一連の事件の因果関係は、ランドが直截に説き明かしているように⁵、そのまま南部文明の滅亡の運命を象徴しているように思われる。要するに、南部の興隆とは本来の人間相互の関係を否定することによって築き上げられた砂上の楼閣に他ならず、それは一種の迷妄であった——

At which moment the destiny of the land, the nation, the South, the County, was already whirling into the plunge of its precipice, not that the State and the South knew it, because the first seconds of fall always seem like soar: a weightless deliberation preliminary to a rush not downward but upward, the falling body reversed during that second by transubstantiation into the upward rush of earth; a soar, an apex, the South's own apotheosis of its destiny and its pride⁶

してみれば、アメリカ史上で画期的な転期を示した南北戦争ですら、旧

南部没落の絶対必要条件ではなかった。ただ、敗北によって、諸々の矛盾を抱えた南部は急激な社会・経済的失墜という憂き目に直面し、絶望と苦悩の深淵であがきながら衰退していったのである。その空前の無秩序の中で、旧南部貴族の虚栄がその後裔たちの異常な伝統意識となって現われ、サルトルが言うような「不可思議な雰囲気」を醸し出す。⁷フォークナーが「歩」という『サートーリス』の後裔、⁸『八月の光』の牧師ハイタワーには過去の亡霊が付き纏う。⁹彼らには自意識も意志力も本来の個性すらもない。殊の外美化された華麗な過去の夢物語、マーガレット・ミッチェルが描き上げているあのロマンス、への郷愁と現実での挫折感とが彼らを操り、現実から逃避させてしまう。即ち、戦前の矛盾を、敗北による南部人の不自然な存在状況と不可解な心理的葛藤として捉えているのがフォークナーの没落南部の描写なのだ。そして、その崩壊する南部の頹廢の諸相を幾重にも描写しているのが『響きと怒り』である。白痴、性倒錯者、ヒポコンドリー患者、敗北主義者、色情狂、利己的実利主義者の登場はそもそもこの小説中のコンプソン家の解体を暗示している。しがしながら、白痴ベンジーの受難と性倒錯者クエンティンの心理には、直接的あるいは間接的に、一家の倫理的無秩序があくどいまでに映し出される。今はクエンティンの精神的葛藤を見てみよう。

先ず、彼の妹との近親相姦の妄想がそれ自体ディープ・サウスの閉鎖的な貴族家庭の一面を示している点で興味深い。『アブサロム、アブサロム！』のヘンリーにとっても、¹⁰『響きと怒り』のクエンティンにとっても、妹の処女性とは家の誇りと名誉とを象徴する。そしてその異常な潔癖症がクエンティンをして、無意識のうちに、妹の情事を自らとの近親相姦の幻想に転化せしめ、かくして、家の名誉を守ろうとする空しい悲劇へと駆り立てるのである。だが、かかる南部青年の審美主義もさることながら、¹¹我々には、クエンティンの意識の流れを通して、没落貴族の虚栄と愛情の破綻とひ弱な絶望感とが具さに読みとれる。例えば ——

When I was little there was a picture in one of our books, a dark place into which a single weak ray of light came slanting upon two faces lifted out of the shadow. *You know what I'd do if I were King?* she never was a queen or a fairy she was always a king or a giant or a general . . . I'd have to turn back to it until the dungeon was Mother herself she and Father upward into weak light holding hands and us [children] lost somewhere below even them without even a ray of light.¹²

クエンティンの名誉意識もさることながら、彼の精神的空洞を語るこの一節は、虚栄心の強いコンプソン夫人の横暴性と、その母の愛の代償を無意識的に妹に求めるに至るクエンティンの心理の動きとを暗示するに十分であろう。のみならず、彼の尊ぶ処女性さえも敗北主義者たる父親によって膠もなく否定され¹³、また、彼の幻想は妹の拒絶にあって無残にも葬られてしまう。ここで拾頭するのが最初に引用したあのサルトルの批判の裏付けをなすコンプソン氏の現実観である ——

Father said a man is the sum of his misfortunes. One day you'd think misfortune would get tired, but then time is your misfortune Father said. A gull on an invisible wire attached through space dragged.¹⁴

従って、「時計が止まった時にのみ時間が生きてくる」のである。¹⁵では、失意のどん底に落ち込んだクエンティンの未来とは何か。父の理論を借りれば、それは妹をめぐる過去の体験の苦い記憶を意識に蘇らせる時間の連続でしかない。かくしてクエンティンは少なくとも従来の理想主義的心象を固着し、かつ、苦悩とその記憶とに終止符を打つべく死を選ぶ。しかも、未来の可能性すら疑わずに。

さて、以上の如き病める貴族階級の諸事情はさておいて、今一つ、戦後南部の、否、全米の、社会問題として表面化してきた人種隔離に目を転じ

てみよう。「アプサロム、アプサロム！」のチャールズの悲劇、あるいは『モーゼよ、降り来れ』のマッキヤスリン家の過去帳の奴隷売買やその虐待の記録を見るまでもなく、確かに、奴隷制度は南部年代記の上に消し難い汚点を残した。だが、逆説めいた言い方ではあるが、その是非はともかくも、社会体制の基礎に組みせられ、社会的に正当付けられている限りにおいては、奴隷制度とは、ともかくも黒人の悲劇と白人の道義的腐敗と黙然たる人種抗争とをもって終るべきものであった。そこでクロード・フォーランはいう、「南北戦争は奴隷制度に終止符をうったが、それは人種問題の解決にはならなかった。むしろその反対である。……人種隔離が奴隷制度に取って代わったのだ¹⁶」と。そして、それによって、南部の倫理秩序の崩壊が激化したこともまた事実である。解放されたはずの黒人たちが自己を意識すればするほどに、また、彼らが自由と平等ののろしを高く掲げれば掲げるほどに、南部人の良心はより遠く彼らを離れ、人種間の社会的軋轢はより激しさを増す。『八月の光』や『墓場への闖入者』では、その感情的摩擦がリンチの恐怖となって現われる。殊に『八月の光』の「白い肌の黒人」ジョー・クリスマスの葛藤の周辺には、アメリカ史上比類ない人種隔離の偏見と醜悪さとが作者のナチュラルスティックな手法で残酷に発き出されている。

ジョーの内的葛藤はあくまで自分は黒い血の流れを引くかどうかの疑問からくる。事実、彼が黒人の子であるという確証はどこにもないのであり、多分に清教徒的な彼にとって、問題なのは、「白い肌の黒人」の宿命、即ち、人種間での疎外感と闘いつつも、自らの存在の真理を探求することである。その意味で、ジョーが社会に求めるものは正義と真理と清廉とであり、彼の心理的緊張は本来内向すべきもの、別言すれば、少なくとも表面的には、静的表象をとるべきところなのだ。さりとして、人種隔離という現実が正義と真理と清廉とをもって彼の真理の探求に組みするはずはない。彼の周辺には、常に、暴力と嘲笑と差別と偽善とがある。つまり、

剥き出しの隔離か、さもなくば、所謂「トークニズム」かである。それらによって彼は無理やり社会的偏見の中へと引きずり込まれていく。なるほど、そこで、その現実での妥協をあくまで拒絶しようと、彼は改めて意志を固くし言う、「いや、今屈服すれば、自分はこうありたいと願って生れてきた三十年という歳月を総て無にすることになる」、と。¹⁸がしかし、彼が最後に味わうものは、やはり、真のモノフォビア、疎外感であり、ある種の敗北感である ——

And yet he is still inside the circle . . . 'But I have never got outside that circle. I have never broken out of the ring of what I have already done and cannot even undo.'¹⁹

『八月の光』はジョーの内的緊張とそれに付随する社会的緊張とを通して偏見に満ちた人種隔離の蘊奥を極めている。そのジョーの悲劇的な立場は、『墓場への闖入者』で平等と権利とを主張して、遂には、リンチ事件に晒される黒人ルーカスのそれと酷似する。二人ながら、人種隔離という現実の中で、当然の要求を掲げるがために、逆に、社会の情と良心とから突き放たれ、孤独感と疎外感とに苦悩する。彼らは人種間の掟に背くから、と人は言う。²⁰そして、それが奴隷制度の結末であった。²¹

ところで、ヨクナパトーフア・サーガにも、『サンクチュアリ』、スノーブス三部作などを例にとれば、現代社会一般の問題 —— 不条理、精神的涸渇、不毛の性、アモラルな高度物質主義等の問題 —— は明確に提示されている。殊に、『兵士の給料』、『標塔』、『野生のシュロ』など、一度南部の作品群を離れた時のフォークナーには、失われた世代やエリオットの側面が相当に強く感ぜられる。²²しかしながら、フォークナー文学の真髓はあくまで彼の「郵便切手のように小さな故郷」の現実と密着した問題、即ち、既述の如き南部の盛衰や人種問題の生々しい描写にある。カーンが言うように、それは正に深黒の文学である。我々とて、フォークナーと聞けば、必ずやあの暗澹たる、残虐な、停滞した情景描写を想起するであら

う。だが、我々が忘れてはならないのは、何はさておいても、「なにゆえに」フォークナーが頽廃した南部を、非情な人種隔離を、それ程まで苛酷に描かなばならなかったからである。一体フォークナーはその倫理的考察の規準を何に置いていたのか。

『アブサロム、アブサロム!』が如実に語っているように、フォークナーには、南部の倫理的墮落とその失墜の要因は、推し極めれば、旧南部人の本来の人間相互の関係の破壊であるとの認識が絶えずあったと思われる。サトペン家の必然的没落に関してワゴナーが使用している術語を借りて言うならば、南部の衰亡とはそもそも対等の人格を有する「一人称と二人称の関係」²⁴の破壊によってもたらされた。そして、作者はその発端を旧南部人による原住民の掠奪であった、となす。後でも触れるが、ここで私は作者がその掠奪を南部の原罪と考え、奴隷制度は言わばその原罪に伴う重罪であり、南部没落の諸相をそれらの罪の応報として捉えていると結論したい。なるほど、掠奪と奴隷制度との上に築き上げられた南部の不倫の塔を宗教的視点を離れて見上げることも可能である。なぜなら、人間本来の相互関係を忘却し、倫理的腐敗を抱えていた事自体、戦後の南部の病める状況を説明するのに十分であるから。が、しかし、フォークナーの作品群を概観した場合、苦悩する、あるいは、何らかの形で人間の本性から逸脱せる、作中人物の周辺には必ずやある種の宗教性が漂い続ける。特に、この際、『モーゼよ、降り来れ』や『尼僧への鎮魂歌』の如く、公然と罪を論じる場合のフォークナーも想起されたい。してみれば、サトペン家の崩壊やまたそれに象徴されている旧南部の衰亡を罪と罰という因果関係をもって説明することもあながち無根の解釈とは言えまい。私見によれば、フォークナーには先ずかかる宗教的な因果に対する意識がある、その意識にたって、罪過そのものよりも、南北戦争後の南部の無秩序を描くことによって、逆説的に南部人同胞に倫理的覚醒を迫っているのが彼の深黒の文学であると考えたいのである。その一面は既述の『八月の光』に明きら

かである。ジョーが人種の溝で苦悩しつつ現実で犯した幾多の犯罪にも拘らず、最後に、キリストのイメージを与えられ、贖罪のヤギの如く死んでいく情景を見てみよう。作者は次のように書き添えた ——

It [Joe's pent black blood] seemed to rush out of his pale body like the rush of sparks from a rising rocket; upon that black blast the man seemed to rise soaring into their [the pursuers'] memories forever and ever. They are not lose it, in whatever peaceful valleys, beside whatever placid and reassuring streams of old age, in the mirroring faces of whatever children they will contemplate old disasters and newer hopes. It will be there, musing, quiet, steadfast, not fading and not particularly threatful, but of itself alone serene, of itself alone triumphant.²⁵

これこそ正しく罪意識に立っての南部現実に対する教訓的一節ではあるまいか。

こう考えれば、上述の『サートーリス』の二人のベイヤーや『響きと怒り』のクエンティンが殊の外病的な内的葛藤に苦悩し、遂には生を全うできず死んでいくという事実は極めて暗示的である。その事実は南部の過去の倫理的罪が如何に残虐であったか、また、旧南部社会内部が如何に頹廃していたかを物語ると同時に、その罪の贖いと秩序の回復という問題が如何に深刻に南部現実の上に申し掛っているかを感じしめる。ましてや、真摯なジョー・クリスマスをも含め、理想主義的・審美主義的な南部青年が、清教徒的な潔癖さと厳格さと良心とを備えながらも²⁶、現実の歪みの中で、無慙にも逸脱の一途を辿らざるを得ない事情を思えば、現実の倫理問題を扱うフォークナーの文字は正に深黒の文字であり、未来を照らす一条の光すらもないかに見える。そしてフォークナーは言った ——

Just to write about the good qualities in my country wouldn't do anything to change the bad ones. I've got to tell people

about bad ones, so that they'd be angry enough, or shamed enough to change it.²⁷

だが、その暗澹たる文学の中にも、『響きと怒り』のディルジーの如く、転変する現実を力強く生き、私心を捨てて頹廢したコンプソン家を支える黒人がいる。また、白痴ベンジーは「道義の鏡」²⁸として、その無垢な感覚的反応の中に一家の無秩序を映し出し、ある意味で、一つの倫理的規準を与えている。では彼らは一体何を暗示しているのだろうか。ここで我々は、既述の如き南部特有の現実との関連性において、フォークナーの理想の考察へと進まねばならぬ。

〔Ⅰ〕 理想のこと

南部現実の無秩序の諸相から判断して、フォークナーが如何なる人間の存在状況をもって理想となすかは自ずと明きらかとなるろう。簡単に言えば、人間の理想的存在とはトマス・サトベンが幼少期を過ごしたような共同体²⁹、即ち、白人の掠奪以前に溯る自由と平等の共同社会、に求められるべきなのである。再びワゴナーの見解を引合いに出せば、それは、「人と物の関係」ではなく、「一人称と二人称の関係」になる社会である。上で述べた通り、その共同社会を汚したのが他ならぬ白人の資本主義的野望であった。とすれば、その社会体制の転倒とは、言うなれば、文明による汚染である。『響きと怒り』のディルジーがより粗野な黒人でありながら、リチャードソンに言わせれば、「アガペー」の権化としてコンプソン家に仕え³⁰、白痴ベンジーが奇しくも汚れなき象徴として現われるという皮肉な結果も、実は、文明に腐敗した南部社会との対比において解釈されるべきところなのだ。そして、そこに、南部社会、換言すれば、文明力故に自らをデフォルメした社会、と自然との対照が試みられる所以がある。その対照によって、我々はフォークナーの理想界の概念を最もはっきりと知りうるのである。

「先ず、ウォレンを援用したメアリー・ロップの批評を引用してみよう —

Faulkner sees nature as more than the background against which his characters live out their lives. To his mind nature is a moral force, almost another character. The relationship of man to nature is an indication of the relationship of man to man, and is equally important.³¹

尤も、かかる自然観はフォークナーの独創でないことは断っておかねばならない。遠く溯れば、ストア哲学者が、また、近くでは、十九世紀浪漫主義者たちが、同様な考証を世に問うた。だが、それはともかくも、ロップの指摘の正当性は中篇「熊」を中心とする『モーゼよ、降り来れ』により十二分に証しされる。

「熊」は原始林を象徴する老熊オールド・ベンの狩を通してのアイク少年の人間形成の物語である。つまり、アイクの森の秩序へのイニシエーションは結果的には人倫へのイニシエーションなのだ。大自然の神秘と壮厳さ、雄鹿の霊の啓示、整然たる原始林の秩序、勇気、誇り、謙虚さ——アイクがこれらに触れ、感知し、また体得した時、熊は正しく彼の愛の対象となる。否、それ以上である。彼と熊の間には、対等の人格と対等の尊厳性とを有す対等の関係、即ち、「一人称と二人称の関係」が生じる。つまり、アイクの獵人としての成長は、対象こそ違え、本質的な人間の自他の関係、南部人が破壊した人間の相互関係への覚醒を意味する。そして、そのアイクの倫理へのイニシエーションの解明に与って重要な鍵となるのが、総ては多にして一であるという二律排反的なストア哲学的宇宙観である。³² アイクとその宇宙との交感による精神的高揚はこうである —

... he had not stopped, he had only paused, quitting the knoll which was no abode of the dead because there was no death, not Lion [a big mongrel which participates in the hunt] and

not Sam [Ike's instructor in hunting]: not held fast in earth but free in earth and not in earth but of earth, myriad yet undiffused of every myriad part, leaf and twig and particle, air and sun and rain and dew and night, acorn oak and leaf and acorn again, dark and dawn and dark and dawn again in their immutable progression and, being myriad, one: and Old Ben too, Old Ben too...³³

ここで、あのワーズワースの自然との霊交や彼の宇宙観を連想しない者はあるまい。³⁴と同時に、狩の後逝ったサムやライオンやオード・ベンが「大地の中で自由」であり「大地に属す」とは何に言及しているのか、との疑問が生じて来よう。それが実のところアイクの、また作者フォークナーの、南部社会の現実把握と深い関連性があるのである。

アイクは自然で徳化された身でやがて南部の倫理的腐敗を眼のあたりにする。先に我々は南部の墮落の諸相を掠奪に始まる道義的罪とそれを一度とて顧みぬ倫理的麻痺の結果としてみた。そして、フォークナーが、南部の盛衰を宗教的感覚で捉えていると思われるにも拘らず、その罪の結果を殊の外残酷に発くことに主力を注いだということも既に述べた通りである。それらの事実を、今、フォークナーは、自然との交感によって倫理的覚醒をみたアイクの口を通し、明示してくれる。マッキヤスリン家の台帳（それは旧南部の生々しい罪の記録だ！）が語る先祖の大罪の数々を驚愕と恐怖の目で繙いたアイクは、「創世記」を脳裡に、次のように述べている――

He told in the Book how He created the earth, made it and looked at it and said it was all right, and then He made man. He made the earth first and peopled it with dumb creatures, and then He created man to be his overseer on the earth and to hold suzerainty over the earth and the animals on it in His

name, not to hold for himself and his descendants inviolable title for ever, generation after generation, to the oblongs and squares of the earth, but to hold the earth mutual and intact in the communal anonymity of brotherhood....³⁵

それに対して、神様の要求されたのは「あわれみと謙虚さと寛大さと忍耐とパンを求める顔の汗」³⁶のみであった、と彼は言う。つまり、本来、人間社会は「匿名」によって象徴されるべき共同社会、平たく言えば、没我的共同体たるべきはずであり、その社会にこそ、人間の真の自由と平等と対等の関係と調和とがあるとなすのである。もちろん、かかる社会に掠奪や人種問題や経済的抗争などであろうはずがない。アイクの論法に従えば、その人間の本質的なあり方を忘却したことこそ南部の原罪であり、自由の喪失であり、結果的にみれば、没落の要因だったのである。アイクは、この罪意識をもとに、汚れた土地に対する相続権を放棄し次第に現実から逃避する。その行為は言わばアイクの南部的原罪の回避と自由回復³⁷のジェスチュアとも言える。だが、その行為の適否はさておいて、ここで問題なのは、自然との接触を通し、アイクが作者フォークナーに代わり南部の罪とはそもそも何か、また、本来人間は如何にあるべきかを直截に語るに至ったという点である。

ついでながら、人間と自然との関係について、もう一つの側面を付け加えておきたい。フォークナーの自然はあるいは「母なる大地」のイメージを伴った女性像として現われ、「生」を暗示し、その神秘的な生命力をもって、停滞せる文明社会に新たな生のあるいは蘇生もたらす。リチャードソンはかかる女性を「大地の母」と呼ぶが、その典型として『八月の光』のリーナ、『野生のシュロ』の無名の妊婦、スノーブス三部作のユーラを挙げられよう。殊にユーラはその豊饒さから言えば他の二人と比すべくもない。³⁹ただ、「道徳力」としての役割からすれば、リーナと件の妊婦の倫理的意義の方がはるかに重要である。リーナは、南部の過去の栄光を夢み、

自らを生ける屍と称する厭世主義的牧師ハイタワーをして、出産に携わせることにより、再び生と自我の立場とに目覚めさせる。ましてや、リチャードソンの次のような巧みな指摘を看過することはあるまい。

Lena Grove is light in August; therefore she is life and light giver; mankind does not end with the death of the Son of Man, Joe Christmas, for through Lena there is another life, another man, another chance.⁴⁰

また、無名の妊婦は一囚人を責任感と、義務感と、生に身を献げる快感とに導いている。「大地の母」はいずれも物に動じず、人知れぬ神秘性を漂わせ、自然の大法に従って力強く生きる。その素朴さと自然のリズムへの順応性とが人を魅了し、結果的に「道徳力」として文明心の麻痺せる魂に訴えるのである。

上のように、人間に対する自然の徳化力、裏返して言えば、文明人の本性からの逸脱、を瞥見して、逆に言えることは、人間の倫理性は彼の自然に対する親近感によって測り知れるということである（それも、ロップ流に言うところ、人間の自然との関係と人間相互の関係との画一性に他ならぬが）。その好例として、『館』でのミンク・スノーブスの心理の動きをみてみたい。彼は、アモラルな現代物質主義者フレム・スノーブスとの姻戚関係を思いつつも、貧困と人生の悲哀とに耐え抜く独立独歩の貧農である。⁴²その最低の生活の中で殺人を犯し、⁴³加えて、フレムの奸計に陥り、長い牢生活を余儀なくされた彼は、不屈の忍従を通し、実質的な自由の尊厳性とフレムの悪辣さを改めて知る。そのミンクが釈放されて復讐に向かう時感するのは大地の吸引力に対する違和感である ——

He was quite comfortable. But mainly he was off the ground. That was the danger, what a man had to watch against; once you laid flat on the ground, right away the earth started in to draw you back down into it. The very moment you were born

out of your mother's body, the power and the drag of the earth was already at work on you; if there had not been other women-folks in the family or neighbours or even a hired one to support you, hold you up, keep the earth from touching you, you would not live an hour.⁴⁴

だが、復讐を果たし、自由な人間として真に解放感を覚える時、ミンクはむしろ大地に身を委ね、バックも指摘する通り⁴⁵、大地に眠る故人との同胞感さえ抱くに至る ——

But he could risk it, he even felt like giving it a fair active chance just to show him, prove what it could do if it wanted to try. And in fact, as soon as he thought that, it seemed to him he could feel the Mink Snopes that had had to spend so much of his life just having unnecessary bother and trouble, beginning to creep, seep, flow easy as sleeping; he could almost watch it . . . down and down into the ground already full of folks that had the trouble but were free now . . . himself among them, equal to any, good as any, brave as any, being inextricable from, anonymous with all of them . . .⁴⁶

このミンクの覚醒は掠奪により汚された土地の本来のあり方とその土地での人間の本質的な自由のあり方を暗示する。つまり、それはアイク・マックスリンの没我的共同体の概念と相通じているとのことである。ただ、アイクと比して、『館』のミンクは、信念ある耐え忍ぶ凡人として、作者の同情と愛と憐憫の情とをもって描き上げられている点で非常に興味深い。ミンクの不屈の意志力と自由に対する意識とは、ワーズワースの田夫野人のそれと酷似しているというのは早計であろうか。

要するに、フォークナーの理想は文明と自然との対比によってより明確化されるのである。なるほど、我々は『響きと怒り』を頂点とする深黒の

文学の中で既に作者の倫理的概念を読み取るべきであろう。しかしながら、例えば、一方でコンプソン家の墮落の諸相を目前に突きつけられながら、他方でディルジの愛他主義やベンジの無垢な直解主義を見たところで、フォークナーの理想の理念は何かを探り当てるには、我々にはあまりにも未知数的条項が多すぎる。その意味で、たとえ陳腐な術とは言え、作者がともかくも自然を持ち出し、南部の罪とはそもそも何か、人間の本質的な条件とは如何なるものか、また、本来的な人間相互の関係は如何にあるべきかを明示したことは特筆すべき事実である。ただし、フォークナーの自然は人間を徳化しうるもの、人間の本性からの逸脱の程を暗示するものであって、それ以上でもそれ以下でもないことは忘れてはならない。

そこで、我々の最後の疑問は、深黒の文学が語る現実と殊に自然との対比において明確化されている理想との間をフォークナーは如何なる手だてをもって埋めようとするのか、ということであろう。上で繰り返したように、作者の描く理想界とは、一言にして言えば、没我的共同体である。では、その実現は、絶対的な信仰に基いてか、人間自らの倫理的潜在力に基いてか。その前に、私は二つの没我的世界像を挙げてみたい。その一つはカントの所謂「目的の国」であり、今一つは純粋なキリスト教的理想界である。前者に関しては、忍耐という語を絶えず持ち出すフォークナーのストア哲学的側面が、また、後者については、アイクの理想界への聖書的コンテクストにおける言及が重要な根拠をなす。

が、フォークナーの信仰による理想界の実現ははっきりと否定されている。『サンクチュアリ』で墮落を極めた templars の悔俊の物語『尼僧への鎮魂歌』を想起されたい。常に自らの罪過の意識にたつて、来たるべき世のために善を志向することは罪人の定めである。だが、キリスト人にとって、神への愛が総てに先行する。人間同胞に対する愛に関しても然り。聖書に「愛する者よ、われら互に相愛すべし、愛は神より出ず……神は愛なればなり」（ヨハネ第一書四の七・八と）いうが如く、愛の根源は神のお

示しになったアガペーに置かれねばならぬ⁴⁷。では、自らの命を犠牲にして、 temple に罪と贖罪との深い認識に導いていく尼僧ナンシーにそれ程純粋な敬神の念があったか。牢中での temple とナンシーの対話を引用してみよう ——

Temple

....Is there a heaven, Nancy?

Nancy

I dont know. I believes.

Temple

Believe what?

Nancy

I dont know. But I believes.⁴⁸

即ち、罪と罰とに関して、ナンシーは敬虔な尼偽でありながら、究極的には、神を否定しているのである。同様な矛盾した見解は『館』の中でのチャールズの言明にも窺われよう ——

....what you need is to learn how to trust in God without depending on Him.⁴⁹

彼にとっても、神はあって神はない。これが、あれほど宗教性を保ちながらも、フォークナーが最終的に到達する次元である。言い換えれば、作者の没我的世界像は神より発する愛によってのみもたらされるべきものではないということである。

その意味で、フォークナーの理想界の実現に関して、我々は彼はよりカント的であると推論できるように思われる。その『道徳哲学』が示すように、⁵⁰カントの「目的の国」とは結局のところ理性的存在者たるべき人間の徳の力によって創造さるべき共同体である。なるほど、カントにも神はある。否、人間理性と相並び、神は、カント哲学の二本の柱である。が、しかし、カントもまたフォークナー同様に、究極的には、理想の共同体の実現

を人間の力、純粹理性の力、に托していると言えまいか。⁵¹殊に、フォークナーが「耐え忍ぶ」という限定調で形容しているディルジーやミンクの描写を見るに、カントが絶賞するストイシズムに対する関心が脈々と鼓動しているように感ぜられる。ましてやワーズワースとカント⁵²およびワーズワースとフォークナーの類似性を指摘できることを思えば、カントとフォークナーの関連性に着目することもあながち不自然ではあるまい。ただ、残念ながら、フォークナーが理性の問題に特別な関心を寄せているという証左は見当たらない。従って、今は、フォークナーにとっても、カントにとっても、没我的共同体の実現に関して、人間の徳性が宗教に対して優位を占めているとだけ言っておきたい。

結局のところ、作者にとって、その理想界が純キリスト教的なものであれ、カント的なものであれ、それは問題外であったとするのが最も無難な結論の仕方であろう。ここで、私は、プラグマティズムを新たに考えてみたいと思う。かかる結論は一見無責任であり、論理性に欠けるように感ぜられるかも知れぬ。しかしながら、フォークナーが現実で捉えたものは何であったか。言うまでもなく、それはあの掠奪に始まる旧南部の倫理的罪の累積であり、暗澹たる停滞せる戦後の南部の歪みであった。その南部の盛衰の過程を作者が宗教的因果関係で捉え、かくして、本質的な人間の理想界を描き上げたのだった。その沈滞した南部で差し当たり必要なものは果たして純粹なる信仰であろうか、哲学的論議だろうか。先ず良心に基いて未来のために行為すること、その善の志向こそ病める南部人の総てではないだろうか。なるほど、パース、ウィリアム・ジェムズ、デューイらによって推奨されたプラグマティズムは如何にもアクリカの合理主義尊重の風潮を象徴する哲学であり、明きらかにアメリカにおける思惟の断層を示している。だが、最終的に、フォークナーはそのプラグマティズムに到達しているように思える。『館』の最初に言っている――

....“living” is motion, and “motion” is change and alteration

and therefore the only alternative to motion is un-motion,
stasis, death⁵³

この言葉は如何にも実用主義的な暗示に富むと言えまいか。「動」とは即ち行為すること、未来の創造のために行為することである。その行為こそ、南部の過去の⁵⁴大罪を贖い、「救いの可能性をより蓋然的」なものに高めうる力となろう。宗教性を抜きにして言えば、その力こそ、現在の無秩序の中から、理想界を実現する力となるべきなのだ。ナンシーが信じているのもかかる潜在力を秘める人間そのものなのである。「村」、「墓場への闖入者」、「騎士の陥穽」、「尼僧への鎮魂歌」、「寓話」、「町」、「館」へと進むにつれ、我々には、フォークナーの行為する良心的人間への関心とその人間の遠い未来での勝利への確信とが次第々々に強まっているように感ぜられよう。そして、フォークナーはノーベル賞受賞演説でいった、「人間は耐え忍ぶばかりでなく、勝利を見るだろう。……なぜならば人間には魂が、精神があるから」と。

〔結び〕

紙面の関係上、作者の理想界とプラグマティズムへの関心をより明確化することは割愛した。いずれ機会をみて改めてそれらの点に触れてみたいと思う。ただ、もう一度、フォークナーの倫理の考察は極めてペシミスティックな描写から始まってはいるが、究極的には、逆に、オプティミスティックとさえ思われる理想界の実現、即ち、人間の勝利、に対する揺るぎない確信の提示でもって終っていることに留意されたい。最後にあたり、1964年版のカーンの『アメリカ文学史』から『黒い文学の一番黒い文学』というフォークナー論が消えていることも付記しておきたいと思う。⁵⁵

注

- 1 Jean-Paul Sartre, *Situations, I: Essais Critiques* (Editions Gallimards, 1947), p. 73.
- 2 ジャック・フェルナン・カーン著, 島田謹二訳『アメリカ文学史』(白水社), 127ページ参照。
- 3 O. L. R. No. Ⅶ, 「*Intruder in the Dust* 評価への道」でいわゆる南部貴族の栄故盛衰の概要について少々触れておいた。
- 4 Cf, Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation* (Louisiana State University Press, 1961), p. 257.
- 5 Ilse Dusoird Lind, "The Design and Meaning of *Absalom, Absalom!*". *William Faulkner: Three Decades of Criticism* (Michigan State College Press, 1965), p. 278.
- 6 *Requiem for a Nun* (Signet Book, 1961), p. 305.
- 7 Sartre, *op cit.*, p. 12.
- 8 Cf. *Sartoris* (Chatto & Windus, 1964), p. 281.
- 9 Cf. *Light in August* (Chatto & Windus, 1960), pp. 56, 58-59, et passim.
- 10 Cf. *Absalom Absalom!* (Chatto & Windus, 1960), p. 96
- 11 Cf. Frederick J. Hoffman, *William Faulkner* (Twayne Publishers, 1961), p. 33. ホフマンは『サートーリス』のベイヤードⅢ,あるいは『響きと怒り』クエンティンの如き青年を「青年審美家」と呼ぶ。
- 12 *The Sound and the Fury* (Modern Library), p. 191
- 13 *Ibid.*, pp. 97, 135.
- 14 *Ibid.*, p. 123.
- 15 *Ibid.*, p. 104.

- 16 クロード・フォーラン著、野沢 協・山口俊章訳『アメリカの黒人』（白水社）、22ページ。
- 17 *Light in August*, p. 329.
- 18 *Ibid.*, pp. 250—251.
- 19 *Ibid.*, p. 321.
- 20 Cf. *ibid.*, p. 331 および *Intruder in the Dust* (Chotto & Windus, 1962), pp. 48—49.
- 21 マーティン・ルーサー・キング著、中島和子・古川博巳共訳『黒人はなぜ待てないか』（みすず叢書）は黒人の疎外感と焦燥感と権利の要求とが殊の外強く感ぜられる。ジヨーヤルーカスの立場をみる上で非常な参考となろう。
- 22 ただし、フォークナーの「失われた世代」の側面はヘミングウェイなどと比して既に南部的色彩が強い。エリオットに関しては、「アルフレッド・ブルーロックの恋歌」、「空ろなる人々」などを連想されたい。
- 23 Hoffman, *op cit.*, pp. 20—21.
- 24 Hyatt H. Waggoner, *Willam Faulkner : From Jefferson to the World* (the University of Kentucky Press, 1959), pp. 165—166. 一応「一人称と二人称の関係」としておいたが、原語はマルチン・ブーバーの“I-Thou relation”を借用している。
- 25 *Light in August*, p. 440. これに関しても O. L. R. No. Ⅶ および Melvin Backman, *Willam Faulkner : the Major Years* (Indiana University Press, 1966), p. 87 を参照されたい。
- 26 Cf. Peter Swiggart, *The Art of Faulkner's Novels* (University of Texas Press, 1967), p. 14. 彼はフォークナーのすべての白人の男性像には多かれ少なかれ清教徒的特質があるとさえ断言する。ただし、フォークナーはホーソーンのようにピューリタニズムそのものを

問題としているのではない点は念頭に置かれない。

- 27 *Faulkner at Nagano*, ed. Robert A. Jelliffe (Kenkyusha, 1962), p.126.
- 28 Lawrance Thompson, "Mirror Analogues in *The Sound and the Fury*," *Three Decades of Criticism*, ed. cit., pp.214—215.
- 29 Cf. *Absalom, Absalom!*, p.221.
- 30 Kenneth E. Richardson, *Force and Faith in the Novels of William Faulkner* (Mouton & co., 1967), p.103.
- 31 Mary C. Robb, *William Faulkner: An Estimate of his Contribution to the American Novel* (University of Pittsburgh Press, 1963), p.33.
- 32 ジャン・ブラン著、相田潤訳『ストア哲学』（白水社）を参照されたい。
- 33 *Go Down, Moses* (Chatto & Windus, 1960), p.234.
- 34 例えば、*The Prelude* (kenkyusha, 1966), Book IV, II. 566—576 を参照されたい。
- 35 *Go Down, Moses*, p.183.
- 36 *Ibid.* フォークナーのノーベル賞受賞演説も参照されたい。
- 37 Cf. *Go Down, Moses*, p.213.
- 38 Cf. Richardson, *op. cit.*, p.91.
- 39 Cf. *The Hamlet* (Chatto & Windus, 1958), p.111.
- 40 南部の口語体表現では「八月の光」とは「八月に出産した女性」を意味する。
- 41 Richardson, *op. cit.*, p.96.
- 42 Cf. *The Mansion* (Chatto & Windus, 1961), pp.17—18.
- 43 Cf. *The Hemlet*. ミンクは牛をめぐるいざこざでヒューストンを殺す。

- 44 *The Mansion*, p. 369.
- 45 Warren Beck, *Man in Motion : Faulkner's Trilogy* (The University of Wisconsin Press, 1961), pp. 181—182.
- 46 *The Mansion*, p. 399.
- 47 エミール・ブルンナー著、熊沢義宣訳『信仰・希望・愛』（新教新書）を参照されたい。
- 48 *Requiem for a Nun*, p. 334.
- 49 *The Mansion*, p. 297.
- 50 カントが究極的に神を否定しているかどうかは速断の許されない問題であるが、現時点では、一応、カントにとっては宗教よりもむしろ徳論が重きをなしていると結論してみた。
- 51 Newton P. Stallknecht, *Strange Seas of Thought* (Indiana University Press, 1958) を参照されたい。
- 52 *The Mansion*, p. 9.
- 53 Cf. William James, *Pragmatism* (Meridan Book, 1967), p. 184.
- 54 Cf. Jacques-Fernand Cahen, *La Littérature Américaine*, 4th edition (Presses Universitaires de France, 1964).